忘れられて行く不安と同時に、明るさの影に、もう一つの現実が見え隠れしていたからだろう。

現在、世界には広島に落とされた原爆40万個に相当する核兵器があるといわれている。また、劣化ウラン弾による被害も深刻になり、更に、兵器以外の核物質による汚染が続く。

（放送作家）

＊岩波ホール（地・神保町）で7月28日（土）よりロードショー。その後全国公開。問合せ 岩波ホール ☎03（3262）5252

日 毎土曜、8月19日のみ日曜開催 9時半 7月28日、8月18日、19日、25日、9月1日は13時半
場所 大阪NPOプラザ（野田）
受講料 10コマ連続受講1万5000円 会員1万円 1コマ（受講人数に余裕があれば受付）2000円 会員1500円
締切り 7月17日（火）
定員 30人
問合せ 国際子ども権利センター大阪事務所 ☎／FAX 06（6462）6735

◆第2回青森インターナショナルLGBTフィルムフェスティバル

多様な性を考える映画祭の2回目、今年は、アジアの人々によって作られた作品を上映する。
日程 7月21日（土）13時
会場 アウガ5Fカダール AV多機能ホール（青森）
上映作品 『HANDS』『僕のマリオおじさん』など
料金 2500円 前売り2000円 映画上映終了後懇親会あり3000円
主催 同フィルムフェスティバル実行委員会
☎ 090（6459）5136（14時～19時）ウエブサイト http://aomori-lgbtfff.org/

本

☆ルポ正社員になりたい娘・息子の悲惨な職場
小林美希 著
影書房
1600円

超がつくほどの就職氷河期に学校を出、社会に放り出された若者は「とりあえずバイト」「とりあえず派遣」となり、その多くは景気が回復したといわれる今でも不安定雇用のままである。

「派遣」「契約」「請負」といった不安定雇用に押しやられている女性たちのインタビューを中心に構成されたルポルタージュ。

著者も「貧乏くじ世代」のひとりで、雑誌「エコノミスト」で若者の雇用問題を企画し、取材を始めた。昔の「寿退社」は「妊娠解雇」に姿を変え、福祉業界の仕事は今や高卒女性の憧れの仕事になり、新卒で派遣も当たり前になっている。

〝一度道を踏み外したらもう戻れない〟と絶望感を抱えて理不尽な待遇にひたすら耐える世代の言葉に、著者はじっと耳を傾け、同じ目線で問題を追う。グローバル化の中での労働政策が、個人の生活や人生をいかに変えてしまうか、その背景を丁寧に織り込んでいて理解も深まる。自己責任論に絡め取られている世代にも、娘や息子を心配する親世代にもおすすめ。学校や就職・転職サイトでは教えてくれない情報を得て、力にしよう。

（竹）

☆やもめぐらし 寡婦の文化人類学
椎野若菜 編
明石書店
3200円

編者は「従来の人類学が、結婚家族を社会の本流であるとして、家族像と社会像を描こうとした結果、捨象されてきた配偶者なき人々にあえて目を向けた」と言う。

そして対象を広義の「やもめ」―配偶者と死別した「寡婦・寡夫」、未婚者、離婚者とし、彼らは、社会の中でどのような位置にあったのかと論考をすすめる。

執筆人は社会・文化人類学者16人。それぞれ異文化社会（日本、中国、韓国、ケニア、オーストリア、イタリア、タイ、インド、ニューギニア、インドネシアなど）で、フィールドワークを行った体験を報告しているから、話が具体的で面白い。

その時代・地域社会・家族・血縁との関係性の中でルールが作られるが、現実社会の寡婦・寡夫の生き方は必ずしもそれに縛られない。庶民には生き抜く知恵がある。

中国を例に取ると、儒教で理想とされる「守寡（再婚しないなど寡婦のあるべき姿を守ること）」生活も昔から貧しい庶民層、農村ではあまり守られない。「農村地域で寡婦が再婚をするのは、家族労働を手伝う成人男性が、同世代にいないから」ときわめて現実的だ。

（K）